

# 東日本大震災における〈住民生活を支える諸機能〉の再編過程

○早稲田大学 浦野正樹

早稲田大学大学院 川副早央里

早稲田大学大学院 野坂真

## 1. 問題意識とその背景

東日本大震災では、津波による役場機能の破壊や原発事故による行政機能の広域避難をはじめとして、住民生活を基本的に支える諸機能が寸断され長期にわたって麻痺状態に陥ることにより、その後の日常生活の回復に甚大なる影響が出ている。とりわけ原子力発電所の事故による放射能汚染の影響は、人びとに長期にわたる広範囲の避難を余儀なくさせ、日常生活の拠点や生活を支える諸機能ですら仮設段階の状態、諸機能の配置はいまだ流動的な状態に留まっている。将来にわたっては地域生活を支える諸機能のあり方やその空間的配置の大幅な変更により、大規模な地域的再編を余儀なくされることが見込まれる。

## 2. テーマの設定と研究フレーム

この一連の報告では、主として〈住民生活を支える諸機能〉が都市(マチ)という空間のなかでどのように紡ぎ直されていくのか、そのロジックとプロセスに焦点をあてながら、地域という関係性をベースにした生活回復のプロセスの一端を描き出し、そこで生じる課題について検討してみたいと思っている。なお、ここで言う〈住民生活を支える諸機能〉は、現段階では不定形で流動的で暫定的な生活状況であることもあいまって、空間的に統御されたかたちでは顕在化していないケースが少なくないが、ごく図式的に単純化してカテゴライズすれば、①行政機能、②商業機能(比較的広域的な後背地全体のなかで、日常的な生活物資を調達することができる商業・流通等の機能集積)、③地域産業機能(地域の雇用を支える工業や地場産業などの機能集積)、④居住機能とそれを支えるコミュニティ機能、といった観点を念頭におきつつ、地域での空間利用の再編過程をみることは意義があろう。

これらの再編過程は、一方では地域での生活再建を可能にするために行われる住民各層のさまざまな生存戦略(試み)の集積である--これらは〈住民生活を支える諸機能〉を回復しつつ、それぞれの住民層やセクターの独自のプロセスとロジックを介しながら復旧・復興への道を歩もうとする試みである--とともに、他方では今回の災害の影響を受けて、一定の危険認知を踏まえうえで何らかの安全性の担保を配慮に入れた今後の地域生活像を铸造し直す試みでもある。危険認知に関しては、東日本大震災の場合は、とくに津波災害と原子力災害がクローズアップされたが、その災害因の違いによっても、危険の認知やあらわれ方、人間生活全般への重層的な影響の仕方、社会的対応の仕方やメカニズムに大きな差異が生じることが、大きな衝撃として体験されてきたといえよう。災害の種類ごとに危険のあらわれ方が異なり、その受け止め方や社会的心理的なインパクトのあり様も異なる次元のものを内包することが次第に明らかになってきたのである。この違いは復旧・復興への歩みの過程やテンポに大きな差異を引き起こしており、〈住民生活を支える諸機能〉の再編過程に大きく左右している。

本研究は、「災害以前から緊急避難、避難生活、仮設生活、復旧・復興を経て、次の継起する災害への予防へ」と循環する長期の減災サイクルをどのように構築し脆弱性を克服していくかを扱う「東日本大震災被災地域における減災サイクルの構築と脆弱性/復元=回復力に関する研究」(科研費基盤研究C/研究代表 浦野正樹)の一環であるが、本報告では現時点での社会情勢や事態の推移、及び研究進展状況を加味して、災害直後から復旧・復興へと向かう局面のなかで経験しつつある出来事にスポットをあて、震災後〈住民生活を支える諸機能〉がどのように再編されつつあるのか、現地でのワークショップやヒアリング調査、各種データや歴史的な資料の収集・解説等を通じてそのプロセスとロジックを明らかにし、そこで発生している課題などについて論じる。関連する二報告では、それぞれ津波被災地と原発事故による被災地をとりあげて上記過程が展開していく姿を描くとともに、そこで直面している課題について扱う。